２０１９年度　学校総合評価

１　今年度の重点課題に対する総合評価

本校での現状を踏まえ、３項目の重点課題を設定して取り組んだ。年度当初に設定した数値目標についてはおおむね達成することができた。当該学部・分掌等が中心となって取り組んだ結果、評価は下記のとおりである。

（１）　言語活動の充実のための幼稚部における保護者支援の工夫

「聴覚障害の理解」や「生活の中の手話」等のテーマで保護者学習会を実施し、言葉を育てる基本的な方法を保護者に伝えて、家庭での関わり方の理解を促した。保護者と幼児が楽しくやりとりできるように、実態に合った言葉の掛け方や絵日記の内容等を保護者にアドバイスした。また「言葉のチェック表」を用いて年２回理解言語数の調査を実施し、家庭での支援の協力依頼や今後の課題の共有に努めた。言葉を育てる方法を保護者と共有し支援する取組を通して保護者自身の変容がみられ、幼児の理解言語の増加にもつながった。

（２）　よりよい生活習慣の育成と心の健康の保持

小・中学部は学級担任による個別面談等を通して、高等部は個別面談や学級活動の時間等に健康に関する話を通して、よりよい生活習慣に対する意識を高める取組を行うと共に「健康づくりノート」を活用して自分の生活習慣を見直すよう促した。また養護教諭が生徒へ講話を行い心と体の健康について理解を促した。生徒会保健委員会の生徒による中・高等部生徒へ啓発活動や中・高等部生徒を対象とした交流分析による講義等を通して、自己分析を行い心の健康保持への意識が高まった。

（３）ＩＣＴ機器を活用した授業づくりに向けての技能の向上

「ＩＣＴ活用指導力等の実態調査」の結果から本校教員のＩＣＴ活用指導力について課題を分析し、ＩＣＴ機器活用の知識や技能を高めるための研修を行った。外部講師による講演やＩＣＴ支援員による実技研修会、アプリケーションや情報モラルに関する事例の紹介、本校職員や他校職員を対象とした公開授業等を通して、ＩＣＴ機器の効果的な活用や活用時の留意点について理解を深めた。幼児児童生徒一人一人の実態に応じた効果的なＩＣＴ機器活用の授業づくりを進めることができた。

２　次年度へ向けての課題と方策

（１）　子供の発達段階に応じた内容を取り入れると共に、現状に応じた保護者学習会を実施する。また、人や身の回りの事象に興味をもてるよう発達段階に応じた活動内容の工夫や環境設定を行う。

（２）　「健康づくりノート」の質問項目を、子供が回答しやすいよう見直しを行う。また「こころ」の項目に課題がある児童生徒のケース会議を行い、障害特性と絡めて分析し共通理解を図り対応する。

（３）　ＩＣＴに関する新しい知識や情報を教員に提供したり、教職員のニーズに合った講習会を実施したりして知識・技能の向上に努める。また、ＩＣＴ機器を使った効果的な授業の工夫とその共有のために互見授業を行う。

３　学校アクションプラン

（様式５）

令和元年度　　富山聴覚総合支援学校アクションプラン（幼稚部）　－１－		
重点項目	教科指導	
重点課題	言語活動の充実のための幼稚部における保護者支援の工夫	
現　　状	・幼児は、表情や態度で思いを伝えたり、身近な人の動きを見て活動したりすることが多い。一方、保護者は子供の思いを知りたい、楽しく言葉でやりとりをしたいという希望をもっているが、理解言語が少ない子供との関わりに戸惑いを感じている。 ・教員が体験に基づいた言葉の指導方法を示し、具体的な幼児との関わり方について保護者の理解を促し、家庭でも行ってもらうことが幼児の言葉の発達には有効であると考える。	
達成目標	①保護者学習会の実施回数　　年６回	②各幼児の目標理解言語数の達成率　　１００％
方　　策	・幼児との関わり方や手話等、言葉を育てるための基本的な方法を伝える保護者学習会を実施する。 ・季節や行事の話題等が書かれた「お知らせ黒板」や絵日記の活用を通して、幼児と保護者が身振りや言葉で楽しくやりとりできるよう支援する。 ・関わり方や言語指導に活用できるよう、「言葉のチェック表」を用いて幼児の理解言語数を定期的に調査し、言葉の成長を保護者と共有する。	
達 成 度	①保護者学習会の実施回数　７回（２月実施予定を含む）１００％	②各幼児の目標言語数の達成率　７５％ （４名中３名が達成）
具体的な取組状況	・「聴覚障害の理解」や「生活の中の手話」等のテーマで保護者学習会を年７回実施（２月実施予定を含む）した。言葉を育てる基本的な方法を保護者に伝えて、家庭での関わり方の理解を促した。保護者の参加率は毎回１００％で、家庭でもキューサインを付けて話し掛けたり、幼児とのやりとりが深まるような質問を投げ掛けたりするなど、保護者自身の変容がみられた。	・体験したことや行事の話題を記入した「お知らせ黒板」や絵日記を活用して、楽しくやりとりできるように、実態に合った言葉の掛け方や絵日記の内容等を保護者にアドバイスした。 ・「言葉のチェック表」を用いて、５月末の理解言語を保護者に調査してもらい、その結果を基に目標理解言語数を決めた。「動物の名前」「遠足の持ち物」等、学校で学ぶ言葉や支援の仕方を保護者に伝えて家庭での支援を依頼し、幼児の理解言語の増加に努めた。１２月末にも調査を行い、半年間の成長と今後の課題を保護者と共有した。あと２語で達成できなかった幼児がいたが、１６８語が６２５語に伸びた幼児がいたなど、大きな成果がみられた。
評　　価	B	①A　②B　※２項目の達成度から総合評価を判断 ②について、保護者と共に聴覚障害幼児の理解言語を増やした。しかし、目標に達しなかった幼児１名は、写真と実物が結び付くようになり、写真カードを使ってのやりとりに指導を変更したため、理解言語数は伸びなかった。
学校関係者の意見	・保護者の目線で、どうしたら子供とやりとりを楽しめるかという取組だった。保護者に対して言葉を育てる方法を伝えていくことは重要である。人工内耳の普及、仕事をもつ保護者の増加など、現状に合った学習会の見直しが必要である。 ・幼児の実態に合った手話やキューサイン等、音声だけでなく様々な手段で言葉の指導をすることが効果的である。 ・自分の思いを伝えたいという気持ちを大切に育てることが言葉を育てることにつながる。	
次年度へ向けての課　　題	・子供の発達段階に応じた内容を取り入れると共に、人工内耳を装用する子供の増加や保護者の状況の変化等を考慮し、現状に応じた保護者学習会を実施する。 ・人や身の回りの事象に興味をもてるよう発達段階に応じた活動内容を工夫し、環境を設定する。	

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

<table>
<tr><td colspan="4">２０１９年度　　富山聴覚総合支援学校アクションプラン　（ 保健部 ）　－ ２ －</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="3">学校生活（保健）</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="3">よりよい生活習慣の育成と心の健康の保持</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="3">・昨年度、「健康づくりノート（とやまゲンキッズ作戦）」を用いて「生活習慣」「こころ」「食生活」「運動と休養」「からだ」の５項目から自分を振り返る活動を実施したところ、学年が上がるにつれ、「生活習慣」の乱れや「こころ」の問題を抱えている児童生徒が増える傾向がみられた。
・「生活習慣」では、スマートフォンやゲームの利用時間が長い児童生徒が、睡眠時間が少なく起床時間や食生活にも問題があるため、児童生徒自身がそれらの関係を理解することが必要である。
・「こころ」では、それぞれの児童生徒によって悩みも違い、相談したり考え方を変えたりしていく中で自分の悩みの対処法を見つけ出す必要がある。</td></tr>
<tr><td>達成目標</td><td>①「健康づくりノート」の記入と個別面談　各学期に１回</td><td colspan="2">②「健康づくりノート」の項目「生活習慣」「こころ」の総合計が１学期より上がった幼児児童生徒の割合　　７０％</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="3">・「健康づくりノート」の記入結果から、学級担任や保健部が幼児児童生徒の実態や傾向を把握する。
・学級担任が個別面談を行い、生活上の問題点を知り、健康でいるために気を付けたいことを考えるよう促す。必要に応じて、「心の健康」に落ち込みのある児童生徒に対して、養護教諭等と連携しながら個別指導を行う。
・面談の際に参考となる資料や情報を保健部より提供する。
・「生活習慣」や「心の健康」について、生徒会保健委員会が中心になって取組み、結果を発表する。
・日頃の生活に役立てられるよう中・高等部生徒を対象に、外部講師による「心の健康」に関する講演会及びワークショップを実施する。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td>①「健康づくりノート」の記入と個別面談　各学期に１回実施</td><td colspan="2">②「健康づくりノート」の項目「生活習慣」「こころ」の総合計が１学期より上がった幼児児童生徒の割合
５８％（生活習慣３０％、こころ５３％）</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td>・児童生徒に各学期に１回、健康づくりノートに記入する機会を設けた。(幼稚部は、保護者が記入）小・中学部は、学級担任による個別面談等を行い、自分の生活習慣を見直すよう促した。高等部は、生徒に応じて個別面談あるいは、学活の時間等に健康に関する話をして意識を高める取組を行った。</td><td colspan="2">・長期休業前に高等部の生徒を対象に、養護教諭が睡眠時間や食事等の基本的な生活習慣に関すること、アサーティブな言い方について具体例を挙げながら講話を行い、心と体の健康について理解を促した。
・生徒会保健委員会の生徒が中心となり、スマートフォンを長時間使用することの弊害や生活リズムを整えることの大切さについて話し合い、ポスターを作成・掲示して、中・高等部生徒へ啓発活動を行った。
・中・高等部生徒を対象として、交流分析による講義を行った。生徒は、質問紙の結果から各自がエゴグラムに表して自己分析を行い、「こころの改造」の方法について資料より選択し考える機会をもった。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>B</td><td colspan="2">①A　②C　※２項目の達成度から総合評価を判断
②について、２学期の記入では、１学期と変わらず一定の評価をした、又は上がった幼児児童生徒は３５／４３名いた。下がった８名の中には、「生活習慣」についての振り返りや自分自身を見つめる機会が増え、厳しく評価した生徒がいた。</td></tr>
<tr><td>学校関係者の意見</td><td colspan="3">・生活習慣は、低年齢のうちに整えていく必要がある。
・「健康づくりノート」の質問項目を具体的にするなどして、子供が回答しやすいよう工夫するとよい。
・こころの問題を障害特性と絡めて分析し、どのような問題があるか把握するとよい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課　　題</td><td colspan="3">・生徒自身の気付きと主体的な活動につなげるため、保健委員会が生活習慣や心の健康等について、ポスターを作成して全校に呼び掛けたり、養護教諭が長期休業前に生活習慣に関する話をしたりして、意識を高める取組を継続する。
・子供が回答しやすいよう「健康づくりノート」の質問項目を子供の実態に合わせて見直す。
・「こころ」の項目に課題がある子供のケース会議を行い、障害特性と絡めて分析し共通理解を図って対応する。</td></tr>
</table>

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

２０１９年度　　富山聴覚総合支援学校アクションプラン(図書・教育情報部)　－ ３ －		
重点項目	その他（教育情報）	
重点課題	ＩＣＴ機器を活用した授業づくりに向けての技能の向上	
現　　状	・県立学校教育ネット再整備及びＩＣＴ教育推進事業により、iPadやApple ＴＶ等複数のＩＣＴ機器が配備され、校内のネット環境が整ってきた。 ・教員のＩＣＴ機器の知識・技能には個人差があり、一人一人の教員がＩＣＴ機器をより効果的に活用して授業を行うためには、知識や技能の向上が必要である。 ・次々に新しくなる情報機器やソフトウェアに関して、情報モラルを含めた最新の情報を周知する必要がある。	
達成目標	・「教員のＩＣＴ活用指導力等の実態調査」の評価が上がった教員数の増加率 前年比３０％以上	
方　　策	・昨年度の「教員のＩＣＴ活用指導力等の実態調査」の結果を分析し、職員に必要と思われる情報を提供する。 ・ＩＣＴ機器活用に関する必要な知識・技能が高められるよう外部講師による実技研修会を行う。 ・最新のＩＣＴ情報が周知できるよう校内の授業で活用可能なアプリケーションやソフトウェアの紹介、情報モラルに関する事例等を校内研修会やグループウェアで紹介する。 ・授業でより効果的にＩＣＴ機器を活用できるよう公開授業を行い、共有する。	
達 成 度	１００％	・評価が上がった教員数　１２名／３２名中（３７．５％） ※平成３１年２月末と令和元年１２月の「教員のＩＣＴ活用指導力等の実態調査」の結果の比較
具体的な取組状況	・平成３１年２月実施の「教員のＩＣＴ活用指導力等の実態調査」の結果から「児童生徒が互いの意見をまとめ共有する」「コンピュータ等を安全に利用する」等の指導・支援に課題があることが明らかとなった。 ・上記の課題を含めた研修会として、外部講師による「ＩＣＴ機器を活用しての授業実践例」を含めた研修会を２回、ＩＣＴ支援員による個別指導や実技研修会を４回、図書・教育情報部によるアプリケーションの講習会を５回実施し、教員のＩＣＴ機器活用の知識や技能を高めた。 ・月に２、３回、グループウェアでＩＣＴ機器の使い方を周知して活用を促したり、情報モラルに関する事例を紹介したりした。 ・本校職員や他校職員を対象にＩＣＴ機器を活用した公開授業を行い、ＩＣＴの効果的な活用や、活用時の留意点について理解を深めた。	
評　　価	Ａ	ＩＣＴ機器に関する研修会やアプリケーションの紹介、公開授業を行ったことで、積極的な活用や指導法の工夫がみられた。
学校関係者の意見	・ＩＣＴに関しては、全職員が基本的な情報モラルの理解レベルに到達していることが必要である。 ・授業における活用は、それぞれの教員の得意なスタイルに合わせて変えていけばよい。 ・学習する上でＩＣＴ機器の利用が効果的な子供とそうでない子供がいる。一人一人に応じた効果的な学習支援を考え用いてほしい。	
次年度へ向けての課　　題	・常にＩＣＴに関する新しい知識や情報を得て、教員に情報提供を継続する。 ・「教員のＩＣＴ活用指導力等の実態調査」の結果等から教職員のニーズに合った講習会を実施する。 ・授業での活用の工夫が共有できるよう互見授業を行う。	

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ：現状より悪くなった）